

ユニセフ

子ども

ネット

ニュース

2003春
NO.4

発行者

ユニセフ子どもネット事務局 財団法人 日本ユニセフ協会 広報室 〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス
電話: 03-5789-2016 フax: 03-5789-2036 電子メール: jcuinfo@unicef.or.jp

ユニセフ TOPICS

イラク

平和こそユニセフの願い

~ユニセフ事務局長が声明~

戦争の緊張がたまる中、キャロル・ペラミー・ユニセフ事務局長は「ユニセフは、現在の状況が戦争にならざりに終わることを希望しています」と声明を発表しました。

ユニセフは1980年代初めからイラクで活動し、1991年の湾岸戦争の時やその後の復興を含め、現在も活動を続けています。しかし、平和を願うからといって、万が一のことを考えずに何も準備しないということはできません。ユニセフは、ほかの国際機関とともに、戦争が起きてても、すぐに子どもたちに対する人道支援をおこなえるよう備えました。

戦争が起きれば、さまざまな施設や道路が破壊され、予防接種

キャンプなどで子どもの命を奪うはしかが流行してしまわかもしれません。

そこで、ユニセフは2月から緊急のポリオとはしかの予防接種キャンペーンをはじめました。400万人以上の子どもにポリオの予防接種をおこなうために14000人の保健員が動員されました。保健員は一戸一戸を訪問して、すべての子どもが予防接種を受けられるように活動しました。すべては時間とのたたかいでいたのです。

「イラクの子どもたちが非常に弱い立場にあることはまぎれもない事実です。事態がどのようなことになると、イラクの子どもたちの健康と福祉が優先的に考えられるべきです」とペラミー事務局長は話します。

ユニセフは、イラク地域に何千トンもの支援物資をすでに運び入れています。これには医薬品や子どものための栄養補助食、水を供給する装置などが含まれています。

イラクの最新情報はホームページで。
<http://www.unicef.or.jp>

©UNICEF/HQ 032-0557/
Shehzad Noorani史上最大の「学校へ戻ろう」キャンペーン
はじまる

2003年はアンゴラにとって、とても大切な年になるでしょう。というのも、27年間つづいた内戦を乗りこえて、史上最大規模の「バック・トゥ・スクール(学校へ戻ろう)」キャンペーンがはじまったからです。

内戦によって、アンゴラ国内の学校もその他の施設もみな壊されてしまいました。学校が足りないこと、

学用品が買えないこと、子どもが働かなければならぬこと、出生登録書がないことなどの理由のために、アンゴラの子どもの44%は学校に通えませんでした。

ユニセフは、キャンペーンに備えて、アンゴラ政府と協力して、4000人の先生をあらたにトレーニン

もども「学校へ戻ろう」キャンペーン

げし、1300の教室を整備し、多くの教材を子どもや先生に届けました。そして、2月10日には、25万人の子どもたちが学校へ戻ることができたのです。

アンゴラ国内では、まだ300万人の人びとが避難生活をおくっています。子どもたちが学校に通えるようになることは、平和と復興への第一歩になります。今後、特に教育を受けられないことが多い女の子も学校に通えるようにすることなどを目指して、キャンペーンはさらに続けられる予定です。

©UNICEF Angola/
Menga Thomas/
February 2003

STORY

アンゴラ



背中には赤ちゃんを抱いて、両手にたくさんの教科書をかかえて、18歳のドロレス・ジャンバは、学校へ向かいます。今日からドロレスは先生です。彼女を50人の生徒が待っています。ドロレスは、新しい「バック・トゥ・スクール」キャンペーンにあわせて、トレーニングを受けた4000人の先生のひとりです。

ドロレスが住んでいるのは州都キトから北へ30キロはなれたクンビンガという町です。戦争のため、クンビンガ全体でも、残っている学校は21校だけでした。でもユニセフの支援で1年のうちに41校のあたらしい学校ができました。

町には市場もあり、学用品も売っていますが、多くの家族は学用品より食べ物を買うだけせいせいです。でも、今日は、子どもたちみんなに、学用品の入ったバッグが届けられました。中には、ノート、えんぴつ、消しゴムが入っています。

8歳のルシアナも学校に行くのは今日がはじめて。バッグをにぎりしめてみんなと先生を待っています。ドロレスの声がひびきました。「さあ、みんな、教室に入ってね」



今日からアンゴラの町のあちこちで、子どもたちが学校へ通う姿が見られるようになるでしょう。当たり前の生活がもどってくること、それが「平和」なのかもしれません。

もくじ

- ユニセフトピックス 1
- 2003年世界子供白書発行「子ども参加」が大切！ 2-3
- 地図で見る世界の子どもたち「出生登録は生まれてすぐの子どもの権利」 4-5
- ユニセフ子どもワークショップ2003報告「“子どもの人身売買”をなくしたい」 6-7
- REPORT & INFORMATION お知らせと報告 8



『2003年世界子供白書』が発行されました

「子ども参加」が大切！

でも、「子ども参加」って何だろう？



世界の子どもたちの状況を伝えるために、ユニセフは毎年「世界子供白書」を発行していますが、「2003年世界子供白書」は、少し違うのがちがっていました。

テーマは「子ども参加」。全ページにわたって、どんなところでなぜ「子ども参加」が必要か、子どもをとりまく問題を解決するために「子ども参加」がどんなに力になるか、といったことが書かれていました。

白書によると、「子ども参加」はさまざまなレベルで必要です。たとえば、家族の中でも、昨年の「国連子ども特別総会」のような場でも、子どもの声が聞かれるようにならなければなりません。年齢も関係ありません。生まれたすぐあとから、子どもは自分にできる方法で、自分の思いを伝えようとしています。その声を聞けるようにおとなも努力しなければならないのです。

もちろん、子どもは、おとなのように知識も経験も十分というわけにはいきません

が、子どもならではのアイディアや意見が、おとなにも社会全体にもよい効果をあたえることが多い場面で証明されています。

それに、子どもが社会で積極的な役割をはたせることは、子どもの成長にもよいことです。みなさんも、自分の意見を聞いてもらえると、何だか自信がつくような気持ちがしませんか？ それに、社会の問題について知り、それらについて自分の意見を聞いてもらえる場があれば、そのことをよく考へるようになります。そんな経験をたくさんした子どもたちがおとなになれば、もっと民主主義的な社会がつくられ、さまざまな問題も解決していくだろうとユニセフは考えています。

課題は、子どもが参加するかしないか、ではなく、「どのように」子どもが参加するかということに変化しつつあります。何千万人の子どもたちが栄養不良や病気になり、搾取などの危険にさらされている今、よりよい子どもの「参加」が問題の解決に役立つことが期待されています。

世界中で「参加」しはじめた子どもたち！

地域の活動で活躍！

ナイジェリアのアビア州にある高校の「子どもの権利クラブ」のメンバーは、赤ちゃんの予防接種キャンペーンに大きな成功をもたらしました。キャンペーン中、メンバーは一軒一軒を訪問して予防接種の大切さを伝え、赤ちゃん一人一人を追跡して、予防接種を受けたかどうか確かめました。活動の結果、それまで予防接種を受ける赤ちゃんは月に8人ほどだったのが、今では月に300人をこえるようになりました。

©UNICEF/HQ01-0249/Justin Leighton

多くの国で子ども議会がひらかれています

タイの若者議会では、76県すべての学校から集まった200人の若者代表（障害のある子どもを含む）が、3日間、7つのテーマについて議論をし、その結果をタイの内閣の会合で発表しました。そして、「子ども参加」が政府の政策として採用されました。

アルバニアでは、全土の80%におよぶ地域で、地域ごとの若者議会が開かれています。毎年、すべての地域の若者議会の全体会が首都ティラナで開かれ、そこでは、おとの議会に対し子どもたちが心配していることが伝えられます。最近では、貴重な自然環境を残す湿地帯での原油調査に反対



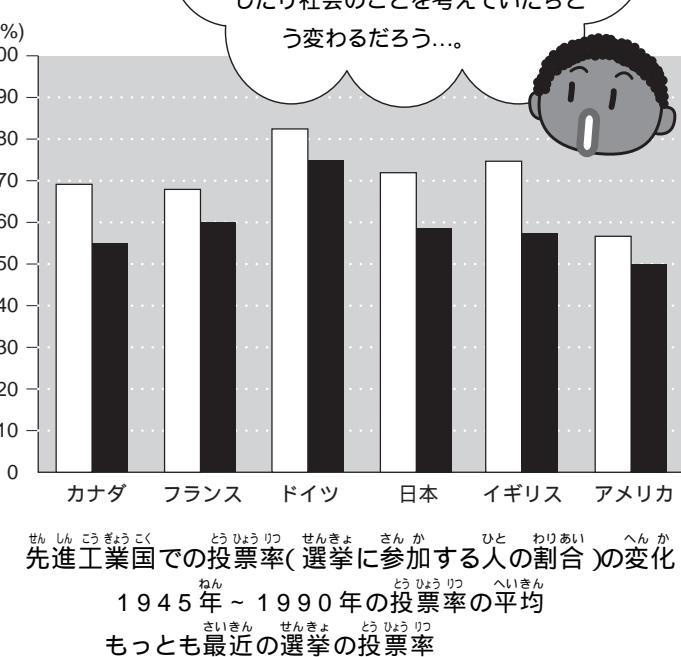
©UNICEF/HQ01-0251/Justin Leighton

おとなたちも努力しています

子どもにやさしい街づくりをして、子どもが参加しやすい環境をととのえようというとりくみが進んでいます。インドのカルカッタでは、市の機関全体が協力して、働いている子どもや帰る家のない子どもなど、すべての子どもを調査して、学校に行っていない子どもを特定しました。学校が足りないこともわかり、市は700カ所に子ども教育センターをつくろうとしています。



©UNICEF India/DCD-0107



ユニセフ子どもネットワーカー緊急大調査



伝えましょう！
子どもたちの声

さて、日本の子どもは、「子ども参加」をどう感じているのでしょうか。2月にお願いした緊急大調査には、びっくりするほどたくさんのお返事があり、どんなにみなさんいろいろなことを感じているのかがわかりました。中には、クラスメイトにアンケートをとってくれたネットワーカーもいました。全部を掲載できないのがとても残念ですが、集まった声をできるだけ紹介します。

質問1 「子ども参加」ときいて、どんなことをイメージしますか？



子どもが意見を伝える場に参加し、おとなと一緒に考えたり、おとなに自分達のことを伝えるとか、同じ子どもなのにぜんぜんかんきょうの違う恵まれていない子どものえんじょに子どもが参加することとか。

いいと思います。でも何をするのか何をしたらいいのか分からないです。それに参加してどのようなことを助けられるのかも分からないです。

とてもいいイメージがあります。紛争などの話し合いなどにはおとなしか参加していないけれど、世界にはおとなだけがいるのではなく、子どももたくさんいるのだから、子ども参加は絶対に必要なと思います。

ユニセフ子どもネットをイメージします。子どもネットで活動をしていると、自分も地球の一員だということをすごく実感するし、私たち(子ども)が「世界の協力」に参加していくなければならないと私に教えてくれたからです。

以前まで、「子ども参加」と聞いてイメージするものはいろいろな活動に積極的に参加する、体を動かし、何か少しでも社会に貢献することであると思っていました。しかし最近ではそれだけではないと思い始めました。私たち子ども一人ひとりが今ある社会問題を理解し、それについて考え、自分の意見を持つこともひとつの「子ども参加」と考えます。

はっきり言って、あまりイメージできません。なぜなら、地域の活動から、世界の大きな活動まで、子どもが参加できる場というのが極端に少ないからです。

現在のイメージとしては、「子ども参加」というスローガンだけで、ただ、子どもも参加しているが、実際はおとなの思うままに動かされているというように思える。

川崎 真奈(11歳)

蓼沼 恵(13歳)

岩下 哲也(15歳)

中佐 友衣(15歳)

寺田 真里子(16歳)

山神 啓明(16歳)

大矢 苗(17歳)

自分の意見を聞いてほしいなと感じたり、子どもに参加させてくれればいいのにと思ったりしたことがありますか？それはどんなことでしたか？

あります。国会に子どもの代表やいろんな世代の人を入れれば、すぐに今話し合っていることをどう思っているのか、きけるからいいと思います。

選挙。子どもだってその地域にいるんだからみんなの意見とは言わないけれど、少しさは子どもの考える行政？みたいなものもいいんじゃないかな？

学校で集めたベルマークの使い方。学校でボランティアというわりに、自分の都合でものを買っている。よく考えて使ってほしいと作文に書いた。けれど400人くらいの学校なのに、ボールを90個も買った。神戸の女の子達は、アフガニスタンへボールを送ったのに…悲しかった。

大矢 格(12歳)

以前、歴史の教科書が問題になっておとな達の間では、毎日議論がなされていたけど、その時に「子どもの意見も聞ければいいのに」と思った。教科書を使う当事者の子どもが参加していないのは、おかしいと思った。

学校中を禁煙にしてほしいと思い、先生に頼んだが、断られたこと。学校は子どもの生活する場所だから、生徒も集まって会議などをやってほしかった。

後藤田 遥(15歳)

国同士の問題で、子どもが出る幕ではないと言われる難しい問題でも、おたがいの国の子どもたちが、どんなことを考えているのか気になる。「おとなが決めることだから子どもたちには関係ない」という考え方ではなく、ぜひ子どもたちも、その問題が解決できるように手助けしてみたいと思った。たとえば、戦争を始めるかどうかを話し合う会議の傍聴に参加し、子ども達の気持ちも無視せずに物事を決めてもらえるように、同じ地球人として存在をアピールする。

高橋 ありさ(15歳)

時々授業の構成がすごく嫌になってしまふことがあります。「こう変えたらもっと楽しい分かりやすい授業になるのではないか」とか授業以外でも「この制度をこう変えたら生活しやすいのではないか」と考えた時に、それを先生に伝えられるちょうどいい場所がほとんど残念に思っています。

藤田 温乃(15歳)

自分の意見を聞いてほしいと思ったのは、ブッシュ大統領が戦争を強調していた時です。大統領は相手の國のためだという趣旨の発言をしていたようですが、戦争をしたら子どもを含めた多くの市民が傷つくことは、私たち子どもでもわかります。だから、子どもの声も聞いて冷静に判断してほしいと思いました。

宗像 明子(17歳)

何かをよくするためのことや、自分の意見を伝えるようなことに参加したことがあれば、その時の経験や感じたことを教えてください

学校で地球を元気にすることをやっていて、リサイクルのことを発表しました。その時は、おとなもきていて、子どもの意見でも正しければ、おとなもきちんと聞いてくれるのだな、と思いました。

丸山 紗子(9歳)

1年生の時に、学校であさがおの種がいっぱい取れたので、どうするかと話し合いになりました。

私は学校の近くにおとしよりの施設があるので、一人暮らしのおとしよりにあげてはどうかと表しました。いろいろな意見が出た中で、担任の先生が私の意見に賛成してくれて、クラス全員であさがおの種を持っていくことになりました。おとしよりは涙を流して喜んでくれて、よかったです。私の意見で今も続いていると思うと、とてもうれしく思います。

宇津木 亜衣(10歳)

インドで地震が起きた時、ユニセフに募金をした。その時、自分のお金が外國の人びとの役に立っているのだと想い、世界のつながりを感じた。

今関 美都(12歳)

市の国際交流センターの「交流祭り」に参加した時、日本ユニセフ協会の宮城県支部の人が励ましてくれて、おとなが自分の考えを理解して協力してくれたことに感激を見えた。センターの方も(自分を)他のNGOの方と同じに扱ってくれたのでうれしかった。

中村 翔也(12歳)

区主催の「子どもフォーラム」(区の小学校の代表者が区役所に集まり、これから区をどうするかについて話し合う)に参加したが、司会がおとなだったのでおとの思い通りに進められていなかった気がした。かたくるしく、あまり良い印象をもてなかつた。

三木 紫子(12歳)

「ユニセフ子どもセミナー2002」でみんなの意見や自分の意見を紙に書いていた時に、みんながぼくの意見にうなずいてくれてうれしかつた。また、みんなの意見を聞いて、みんなも一生懸命だなというこつを感じました。

渡辺 瑞(13歳)

役員会の選挙の時、自分はこんな理由で立候補したということをみんなに伝えた。選挙が嫌で、立候補するか迷つてたけど、思い切ってやってみた。自分が思っていることを他人に伝えることで、自分の中でも整理ができ、とても充実感を感じた。

E.A.(14歳)

小6の時、子ども国会に参加しました。スケジュールとか発言者とか決めたのは、おとなでした。(発言者はあらかじめ質問を提出しておいて、そこから選びます)自由な意見とか、会議の進行中に考えついたこととか発言できなくて残念でした。

大矢 透(14歳)

去年の秋、3連休を利用して「ブンとミーチャの物語」原画展をひらきました。子ども買春を来ていた方に理解していただくことはとても大変だと気付かされました。「これで一体何を伝えたい」という強気な意見もあり、「こういう現状を知ってもらいたい」と答えるばかりませんでした。「今は活動を進めている」などと言ひたかったです。

N.啓子(15歳)

年に3回の生徒相談会のようなもので、これから生徒会活動について意見を述べる場があつたのですが、なかなか周りで手を上げる子が少なく、私も手を上げられませんでした。ですから、自分の意見を伝えるようなことに参加したことはない気がします。

山口 梢(15歳)

中学校では何でも生徒達が提案し、アンケートをとり、決定していた。心の面で成長できたと思うし、その楽しさも知った。高校に入学して、一方的に校則を押し付けられ、常に教師と生徒間で対立が起きているのを見ると、なんとも言えなくなる。私が個人的に生活指導の先生に意見を出したら「それはこの高校の代々の伝統だからしようがない」と言われた。(ちなみにその伝統は県民の日11月半ばまで体育は半そで短パンというもの)おとなは楽なほうを考えるけれど、実際身をもって感じている子どもの意見を聞いてほしい。

石川 未来(17歳)

みなさんが考える理想的な「子ども参加」とはどんなものか教えてください

“おとが子どもの意見を聞いてくれて、それによって世界が動く”というのが理想的な「子ども参加」だと思います。未来は私たち子どもが主役だから。

杉浦 紗子(12歳)

これから日本の子どもが中心となって動いていくのだから戦争や核兵器の問題などはごく一部の人達が考え、実行するだけではなく、子どもの意見を聞いてくれて、国会などにも子どもを参加させてくれたらいいなあと思います。

鈴木 彩子(12歳)

子どもにも発言させてほしい。たとえば国会とか市議会とか、県議会とか。まつ、とにかく子どもにも意見をさせて！そして行動させてください！という感じです。おとなも子どもも関係なく意見が言えるようになってくれたらいいなあ(理想的的や!)と思います。

澤田 紗奈(13歳)

はづけん こうどう せいりげん じゅう たの たの うご せんそう かくへいき もんたい いちぶ などのではないでしょうか？伝えたいことがありますあっても「周りから変に見られるからやだ」など思つて伝えてしまふこともあります。それに伝えたとしても、否定されてしまつたり、聞き入れてもらえないなつたりすると、不安になつしまうこともあるので、あたたかい環境が必要だと思います。

森田 江璃子(13歳)

子どもには感じていることが本当はたくさんあるけれど、それを言葉にできず、心の中にしまつてある人がたくさんあると思います。たとえば、発言する場を作つてあげたり、その意見について一緒に考えてあげたり…など方法はいろいろあると思います。

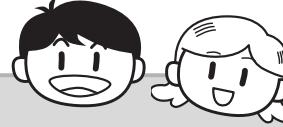
崎田 ゆかり(14歳)

しあわ く たの たの こま ほんとう こと ぱ こころ なか 幸せに暮らしている子どもこそ、大変な生活を送っている子ども達のために、学校・地域・国から支援していけばいいと思います。小さなことでも参加して、世界の状況に目を向けて生きていくことも参加することだと思います。

中澤 真由美(15歳)

国連子ども特別総会では、本当に困っている国や地域の子ども達が「子ども参加」できたのでしょうか？世界には、学校にいけない子どもが1億人以上います。私たちが知らないだけであつて、世界の国々には自分の意見を言いたくても言えない子ども達が大勢いると思います。将来、過酷な生活中で、暮らしている子ども達がもっと参加できるように、意見を述べられるようになれたらいいと思います。

木谷 恵子(16歳)



ち す み せ かい 地図で見る世界の 子どもたちのようす

しゅつ しょう とう ろく 出生登録は 生まれてすぐの けん り 子どもの権利!

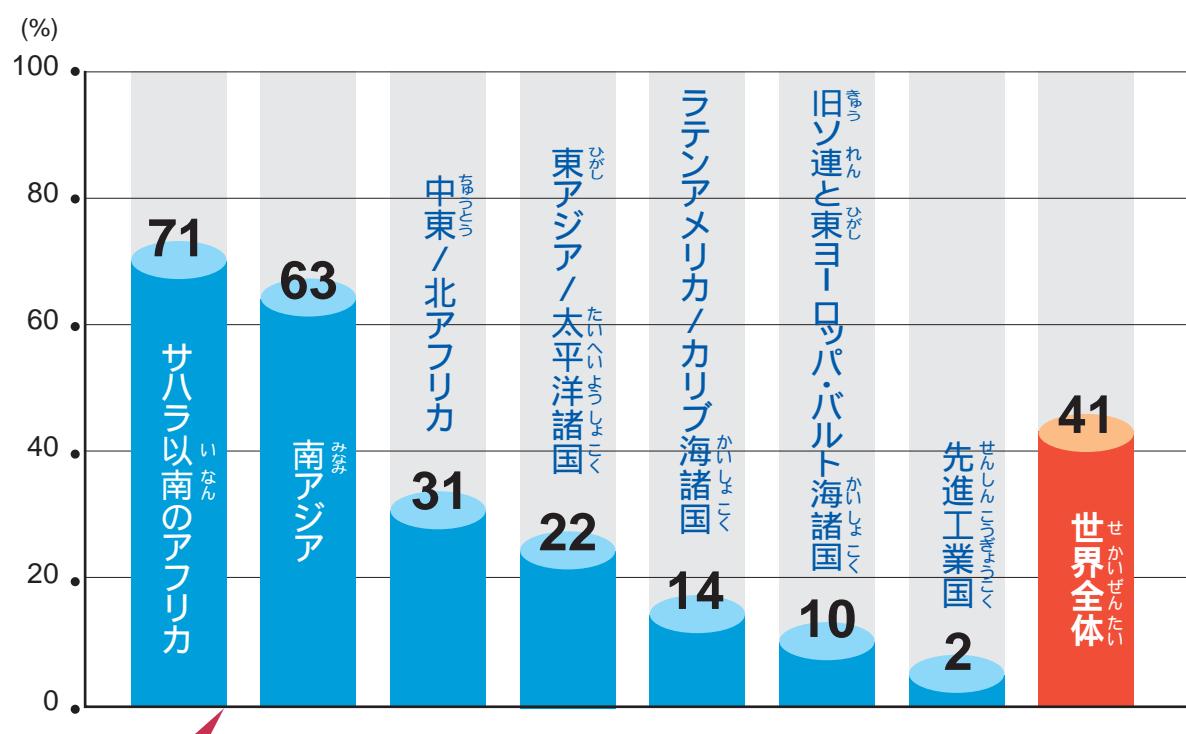
みなさん、生まれてすぐに自分の出生届が役所に出されたことを知っていますか？ いつ生まれたか、両親はだれで、男の子か女の子か、なんという名前か…。こうしたことを登録してはじめて、みんなの存在がちゃんと認められます。

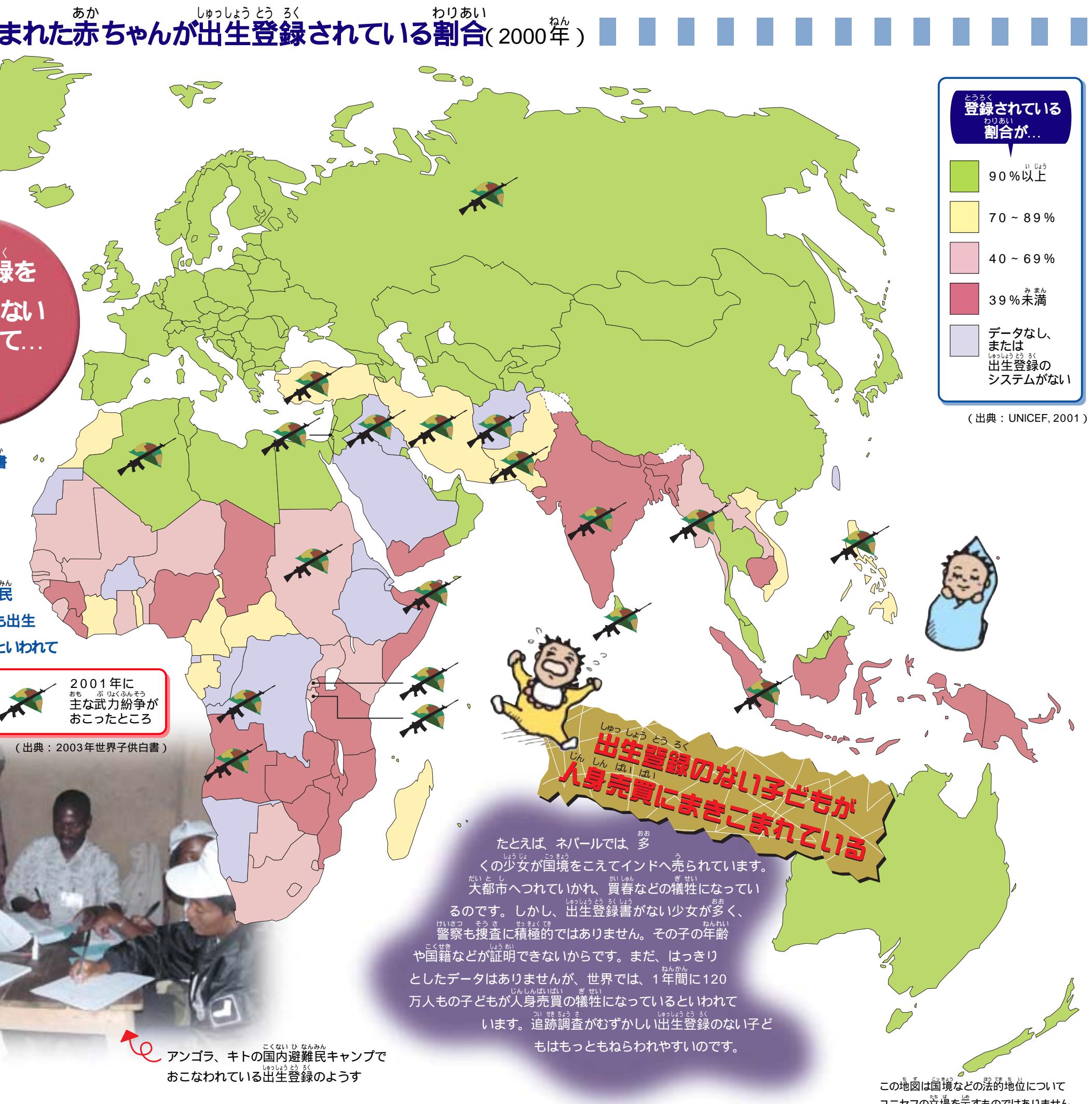
そして、登録されてからは、決められたときに健康診断や予防接種のお知らせが届き、学校に行く年齢になれば近くの小学校に入る手続きをするようにお手紙が来ます。

もし、この届が出されていなかったらどうでしょう。みなさんは、公式にはこの世界には存在しないのです。予防接種のお知らせも、学校に入る通知も来ません。その子の名前はだれにも認められていません。国籍もないことになってしまいます。おとなになっても、結婚したり、銀行の口座をつくったりできません。選挙にも参加できません。

世界中で2000年に生まれた子どもの41%、なんと5000万人以上がこうした登録をされずにいます。その結果、予防接種などの保健サービスを受けたり、学校に通ったりすることがむずかしくなっています。

出生登録こそが、教育や健康の権利、名前や家族の権利、搾取や虐待から守られる権利を保障するための、第一歩なのです。





ア・ジョセフィーナ・ベオモンは、26歳のおかあさん。歳9ヶ月になった娘のヨネアレンがそばで楽しそうなをあげています。でも、この2人の名前は、政府や役んな記録にものっていません。アは生まれたときに、出生登録を受けられませんでしたから、娘のヨネアレンも登録することができなかつたのです。「もし子どもが病気になっても、病院ではみてくれません。だって、わたしがこの子の母親だとは証明できないのです。手術が必要になっても、わたしにはそれを認めるサインをすることもできないのです。とてもおそろしいです」とマリアは話します。

でも、登録をしようと思って、それはマリアやヨネアレンにはとてもむずかしいことです。なぜなら、車で20時間もかかる街の裁判所まで行かなければならぬうえに、その作業は時間もお金もかかるからです。ペネズエラには2500万人の人が住んでいて、そのうちの半分が18歳未満の子どもです。ユネセフは、そのうち100万人以上が出生登録されていないと考えています。

ある日、マリアの住むところで新しいシステムがはじまりました。デフェンソリアとよばれる施設がオーブン



ブンし、そこでは、出生登録から生活保護のお金を使い込んでしまう父親の対処まで、簡易裁判所のようなことをしてくれます。そして、すべて無料なのです。今では、ペネズエラ全体で、175ヶ所以上のデフェンソリアがオープンしました。毎日50件もの依頼が入るところもあります。子どもの権利を守るために地域の中心になっているのです。
無事に登録がすんだマリアとヨネアレン。いつもと同じようにヨネアレンは笑い声をあげています。これからは何かを心配しつづけなくていいし、みんなが自分を認めてくれる。そう思うと、今日は、マリアもヨネアレンといっしょに心から笑えるような気持ちになりました。



最初にみんなでゲームをしながらリラックスしてなかよくなりました。

ユニセフ子どもワークショップ2003

子どもの 人身売買 をなくしたい!



©UNICEF/HQ00-0983/Achinto

「子どもの人身売買」なんて聞いたことがない、という人も多いかもしれません。子どもがモノのように売り買いされるなんて、どこか別の世界の話のような気がするかもしれません。でも、世界には家族とはなれて働きに出たり、モノのように売り買いされている子どもたちがいるのは本当のことです。

2月22日開かれた「ユニセフ子どもワークショップ2003」では、どうしてそんなことがおきるんだろう、それをなくすためにはどんなことができるんだろう、そんな疑問をみんなでぶつけあってみました。午後には、アジア7カ国で活躍するNGOのスタッフやユニセフの現地職員17人が参加して、さまざまな話を聞きました。

「子ども活動プランナー」に応募してくれたネットワーカー6人からの報告です。

午前のプログラム

「ブンとミーチャのものがたり」のビデオを見た後、7つのグループに分かれて、悲しかったこと、嫌なこと、良かったこと、変わつてほしいこと、自分たちにできること、について話し合いました。

私のグループでは次のような意見が出ました。

q・おとの利益のために子どもを売り、物のように扱うこと
・人身売買がいろいろな所で起こっていて、またその現状を知らないこと
w・おとの経手で子どもをあつかうこと
e・おとなが子どもに暴力をふるったり、だましたりすること
・希望を捨てずに、おたがいに支え合える友達がいたこと
・つらい経験を話すことで、多くの人が現状を知ることができたこと
r・教育を受けるなどして、人身売買の現状について知っていればよかった
・子どもを勝手に売らない
t・おとなも正しい情報を知らないから、多くの人に伝えたり教えてほしい
・ユニセフなどに協力してもらって、子どもを保護する施設を建てたり、薬を提供したりする
発表のときには、模造紙に絵を書いてカラフルに仕上げたり、人形劇のようなかたちで発表したり、各グループで工夫しました。（内田沙希 16歳）

門番が居眠りをしていなかったらブンとミーチャはどうなっていたんだろう、どんなひどい状態でも学校のことを知っていて、エイズのことを知っていたらどうなっていたんだろうか？ブンが自分の体験したことを村の人たちへ話してくれてよかった、などの意見が出ました。ぼくの班では意見を物語の流れ通りに置きかえて整理しました。代表的な意見は、好き勝手するおとながいなければミーチャが死ぬことはなかったというものでした。（丸竹拓也 13歳）

一番多かった意見は、おとなが子どもを勝手に売ってしまうのはいけない、ということでした。この物語を見て「よかったところはどこ？」と聞かれ、みんなの答えは一つになりました。それは友達と助け合い、夢をあきらめず支え合ったことでした。親は自分の子どもを売った後に、その子が暴力を受けて苦しんでいることを知らずにいる。そんなおとなは許せないと思いました。（マーシー・ローズリン・萌実 13歳）

私のグループで出した意見は、次のようなものでした。人身売買をする悪いおとなは、自分の利益しか考えていない。子どもの権利を無視し、平気で子どもを物のように扱うことができる。私達にできることとして、人身売買という現状をなるべくたくさん的人に知ってもらい、人身売買から子どもを守ることができる良いおとなになってもらうこと。今の自分達の環境を当たり前のこととしてとらえないこと。人を思いやる心を忘れないこと。また、人身売買の被害にあわないと、正しい教育や情報を得られる環境が必要だ、などなど。悪いおとながいて幼い時はきっと純粋な心を持っていたと思います、心のどこかにまだ残っているはずの純粋な部分を表に引き出せればいいのにあと思いました。（須賀知佐子 13歳）



ブンとミーチャのビデオを見た後のグループごとの話し合いのようす

子どもの権利を買わないで

『ブンとミーチャのものがたり』あらすじ

ブンは、南の国のかなまくにに住む12歳の女の子。お金はないけれど、みんなでなかなかよく暮らしていました。ある日、村にテレビという名の箱がやってきました。みんな不思議な箱におおさわぎ。持ってきた男が、ブンのおとうさんにささやきました。「ブンを都会に働きに行かせよ。子守りの仕事を。それでこの箱の代金になるよ」都會へのあこがれもあり、弟や妹もよろこばせたかったブンは、働くに行くと答えました。

でも、ブンの連れていかれたところは、洋服工場。毎日朝から晩まで休みもなく、食事も十分与えられず、つらい仕事をさせられます。なぐられたりもします。そんなとき、工場の見はりの男がブンに話しかけます。「もっとかせぎのいい仕事があるんだ。紹介してやってもいいよ」ブンは男を信用しました。1日でも早く家に帰りたかったのです。でも、連れていかれたところは薄暗い一軒屋。閉じこめられ、ブンは毎日、何人もの男に乱暴されるようになってしまったのです。



毎日泣いていたブンに、同じところではたらかされていたミーチャという友達ができました。ブンとミーチャはおたがいにはげましあうようになりました。

そんなある夜、見はりが居眠りをしている間に二人は逃げ出し、施設に保護されます。でも、ミーチャはすでにエイズにかかっていて、「いっしょに行きたかった」という言葉を残して死んでしまいます。ブンは、今では、施設に逃げてきた女の子の世話をし、ブンやミーチャのような少女がうまれないように、山の村をまわって話を続けています。



グループでの話し合いをみんなに発表しました。

ミーチャがエイズになって、死んでしまうという悲しい場面を見て、涙をこらえるのが精一杯でした。ミーチャのようにエイズに感染し、死んでしまった罪のない子どもがこの世界に何人いるのでしょうか。可哀想で可哀想で胸がしだめづけられる思いです。わたしは無理に働かされることもなく、学校にも行けて、おいしくて栄養のあるご飯を毎日食べられる、それが普通だと思っていました。世界にはブンやミーチャのような子どもがたくさんいて毎日死ととなり合わせで暮らしているのです。そのことを忘れないで生きていきたいと思いました。（神谷芽里 14歳）

「ブンとミーチャのものがたり」を見て上のq～tについてまとめた結果、人身売買で子どもをモノのように扱うおとな達は子どもの人権を無視しているし、そういった勝手なおとながたくさんいることは問題である。傷ついた子どもを保護する施設があつた。思いやりのある心の存在は大切である。人身売買の恐ろしさをみんなに伝わらせる教育が重要で、私たちはこういった事実からしていくべきであるなどの意見から、q「子どもの権利無視」w「勝手なおとな」e「心と心」r「教育」t「知ることからはじめよう」というキーワードにまとめました。（藤田温乃 15歳）

午後のプログラム

カンボジア・グループ

「OUR HOME(私たちの家)」というNGO(非営利組織)で活動しているハン・ビボルさんの話を聞きました。カンボジアではストリートチルドレンの数が1万人を超えており、問題が深刻になっています。そこでストリートチルドレンの保護のためのセンターがつくられ、昼間子どもたちが過ごせるようになっているそうです。保護された子どもの内には体を売って生活してきた子もたくさんいます。

ある男の子の話です。お母さんは離婚し、新しいお父さんが一緒に暮らすことになりました。新しいお父さんはよく暴力をふるい、男の子は家にいられないくなってしまいました。男の子は街でいろいろなことをして働きます。夜は体を売ります。そのうち、男の子のお母さんも、彼が働くお金で生活するようになりました。お金がなくなると、お母さんは子どもの体調を気にせずに背中をポンと押して、また働きに行かせます。お金がない日は、ホテルのゴミ箱で食べ残しを拾って食べます。それが続くと、お母さんは自分の子どもを売り、そのお金で食べ物を買っているそうです。今、この男の子はセンターに保護されています。センターでは、美容師になるためのことなどが教えられています。お金を手に入れるために体を賣ることしかできないのでしょうか、「他にも靴みがきや車をあらうなどの仕事がある。でも一番手っ取り早くお金が手に入るのが体を賣ること。1回で5ドル~20ドルになる。(およそ600円~2400円、カンボジアでは1日3食、1週間は食べることができる金額)」と教えてくれました。生き抜くには、自分の体を賣るという選択肢を選ばざるを得ないという現実がたしかにあります。

(マーシー・ローズリン・萌実、神谷芽里、藤田温乃)

Cambodia

アジア7カ国(タイ、ベトナム、カンボジア、ミャンマー、フィリピン、ラオス、バングラデシュ)から来日していた子どもの人身売買を防止する活動をしているNGOのスタッフやユニセフの現地職員から、グループごとに話を聞きました。

フィリピン・グループ

ユニセフのヴィクトリア・ジュアットさんと、NGOのドロレス・アルフォルテさんからお話を聞きました。フィリピンは、島が集まってできている国で、島と島の間に人身売買がおこなわれているそうです。ひとつの家庭に4~6人の子どもがいて、生活が大変で、小学校さえ卒業できない子もいます。ストリートチルドレンが多く、物ごいをして生活しています。お腹がすくのをまぎらわすために麻薬を使っていることもあります。そのためマフィアによって管理され、バーなどで働かされることもあるそうです。

一番衝撃を受けたのは、ドロレスさんの経験談です。1993年に東京を訪れたドロレスさんが、調査のために日本のポルノ雑誌を買つたら、そこに7~9歳、11~15歳ぐらいと思われるフィリピンの子どもが裸のままうつっていました。雑誌を持って帰り子どもたちをさがしたところ、首都マニラの貧しい人びとが暮らす場所にいるのを見つけたそうです。子どもたちに話を聞くと、フィリピンのさまざまな地域や島からここに連れて来られ、日本人に管理されているということです! なかにはマニラで過ごした後、日本に連れて行かれる子どももいるといいます。現在フィリピン政府に捕まっている日本人もいるらしく、話を聞いていただけでも、同じ日本人としてとても恥ずかしかったです。

Philippines

いくつか質問も出ました。

Q. 人身売買の原因でもある貧富の格差の原因は何ですか?

A. 人口の40%以上が貧困層の暮らしをしています。原因にはフィリピンがほかの国によって支配されてきた歴史があります。300年前にはスペインの植民地で、その後アメリカや日本にも支配され、独裁政権(マルコス政権)が20年続きました。

Q. 日本の援助交際についてどう思いますか?

A. 日本の子どもとフィリピンの子どもは環境が違います。自ら進んでそんなことはやることはフィリピンではありません。

Q. 私たちに何ができますか?

A. 世界中でこれだけ人身売買が起きていることを話し、子ども買春は犯罪だと教えてほしいです。

(内田沙希)

ワークショップで感じたこと

私はこのワークショップで日本人がおこなっている行為を改めて知り、日本で人身売買がどれだけ軽く受け止められているかを感じざるを得ませんでした。先進国が、お金武器に他国の子どもの人権を奪うということは絶対にあってはならないことで、もっとほかにやるべき役割があるのではないかでしょうか? 多くの人間に心を持ってもらうためにも、みんなでこの問題を伝えなければならぬと思いました。内田沙希

日本のぼくたちは結構裕福なのでそのことを頭においで生活しようと思います。またぼくたちが将来おとなになった時、人身売買をしないことがぼくたちでできる最大のことだと思います。 丸竹拓也

参加者は最後に、人型に切りぬかれた画用紙に、自分の似顔絵と自分がこれからやりたいことやメッセージを手紙にして書きました。それを大きな模造紙に手をつけているようにはいました。

バングラデシュ・グループ

バングラデシュのミザヌー・ラーマンさんが来ました。ラーマンさんは25年前に活動をはじめました。バングラデシュでは、年間1万人から2万人もの子どもや女性がいろんな商品や食べ物などに誘惑されて、人身売買の犠牲になっているそうです。人身売買される子どもの主な利用方法は、ラクダレース、性の対象の目・頭蓋骨・心臓などの臓器を取って売る、など。売られていく場所は主に中東だそうです。また親せきの間でも人身売買がおこなわれているそうです。

ラーマンさんが活動をはじめたころにくらべて人身売買は減ってきてているそうですが、犯罪組織化されてきているそうです。きびしい法律があるそうです

が、人身売買をしている人たちは、

道徳心がなく、まるがしこいのでな

かなか取りしめることができないそ

です。また団体に脅迫電話がかか

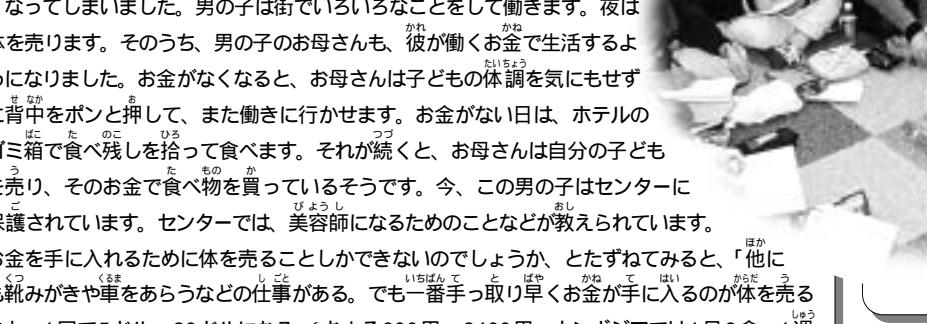
てくることもあるそうです。ラーマンさ

んの団体に助けている子どもの数は年間約

400人だそうです。売買されている子どもや女

性の数、1万や2万にはまだ遠くありません。

(丸竹拓也、須賀知佐子)



各国で活動するNGOやユニセフのスタッフから話を聞く参加者たち。リラックスしていろいろな質問をすることができました。

そのほかのグループで話されたこと

ミャンマー・グループ

1990年代に働き先を求めて多くの子どもがタイや中国に出ていった。1999年の調査の結果、そうした子どもたちが人身売買、児童労働、麻薬、エイズなどの問題に直面していることがわかった。タイなどでは、働かせるために子どもに麻薬を飲ませていることさえある。麻薬を飲むと、気分がたかまって、よく働くようになる。けれど、麻薬中毒になってしまふ。ミャンマーには、人身売買を防ぐための政府の委員会や警察があるが、女の子たちは表ざたになることをいやがって、あまりうつたえたりしない。

ラオス・グループ

ラオスでは、6月から12月の雨季の間、多くの若者がタイへ出稼ぎに行く。はじめは、ウェイトレスになったり、工場で働いたりするが、性産業に巻き込まれる人も出てくる。子どもの人身売買には、仲介者がいて、時には警察が手を組んでいることもある。一番の予防方法は、生活能力を高め、知識を持つこと。他に現金収入を増やすためのプログラムなどがおこなわれている。

タイ・グループ

子どもを買うおとは、タイ人だけでなく、外国人もいる。子どもは監禁され、逃げればひどい罰を受けられる。長期的なケアができる保護施設などは不足している。人身売買を禁止する法律もあるが、警察はあるまりきびしく取りしまるうとはしていない。タイ国内での人身売買は減っていても、まわりの貧しい国から少し豊かなタイへ人が流れてくるので、人身売買の件数は増えている。防止がもっと大切。そして、救出し、保護すること。もし自分の身に起こったら何をしてほしから、それを考えねばすべきことがわかるはず。



各グループごとに、聞いたお話をもとに、人身売買のさまざまな場面を再現しました。各国の状況などが、それぞれ特徴のある発表で報告されました。

Thailand

ベトナムでは、1979年に社会の刷新政策「ドイ・モイ」が始まった。これにより、経済にも資本主義的な仕組みが取り入れられ、人びとの生活も豊かになったが、人身売買の問題が起きたのはドイ・モイがはじまってからである。ベトナムには、50以上の民族が暮らしていて、経済的に貧しい少數民族が人身売買を利用されやすい。最近は政府の防止キャンペーンの情報が伝わるようになってきたが、まだ増加の傾向にある。防止に協力することが最初にやらなければならないことである。

Vietnam

初対面の人たちと話し合ったりするのは初めてで緊張しましたが、よい経験になりました。一番心に残ったのはわたしたちと同年代の子が人身売買の犠牲になっていたことです。同じ命としてこの世に生まれてきたのに、毎日毎日生きるために体を売り、好きでもないことをさせられ苦しんでいる子どもがたくさんいます。わたしはこの現状をより多くの人に伝えたい。多くの人に訴えたいです。子どものことを真剣に考えて下さい。子どもの権利を守り、同じ人間だと理解して下さい。やめて下さい、人身売買。

神谷芽里

子ども達は、自分は生きる権利があるんだ、ということをおとなに伝えないといけないなと思いました。人が人身売買の問題に直接引きかけたりすることはできないかもしれないけれど、今、自分にできることをどんどん実践していかないと考えています。

須賀知佐子



REPORT & INFORMATION

お知らせ Information

署名
活動

「子どもの人身売買」の根絶をうったえる 署名キャンペーンがはじまりました

現在、世界では、毎年120万人の子どもたちが人身売買の犠牲となっています。日本でも、フィリピン、タイ、コロンビアなどの国々にから人身売買の犠牲となつた子どもたちが送られてきています。

しかし、日本では、「子どもの人身売買」を取りしめるための法律がまだありません。のために、日本政府が昨年5月10日に署名した『子どもの売買、子ども売買春および子どもボルノグラフィーに関する『子どもの権利条約』の選択議定書』の批准（国が条約の内容に最終的に同意すること）ができないままになっています。

日本ユニセフ協会は、日本がこの選択議定書を早く批准し、必要な法律の整備を急いでおこなうように国会に求めたいと考えています。今回の署名活動もそのためのものです。

署名の期限は6月末までです。署名用紙がほしい人は、ユニセフ子どもネット事務局までご連絡ください。また、ホームページでもダウンロードできます。（<http://www.unicef.or.jp>）

セミナー

日本ユニセフ協会大使 アグネス・チャンさん 大使就任5周年記念連続セミナー

1998年4月に日本ユニセフ協会大使に就任したアグネス・チャンさんが、就任から5周年にあたる今年、これまで訪問したタイ、スーダン、ティモール、フィリピン、カンボジアでの体験や、日本国内で参加したユニセフ支援活動の思い出、日本の子どもたちに期待することなどを話す6日間連続のセミナーがひらかれます。関心のある人や参加したい人は、子どもネット事務局までご連絡ください。1日だけの参加でも大丈夫です。

日時	各日のテーマとゲスト
2003年 4月21日(月) - 25日(金) 午後6時30分 - 8時30分	21日 私とボランティア：香港から日本、カナダへ ゲスト：亀淵昭信（株エッポン放送代表取締役社長）
4月26日(土) 午後2時 - 4時	22日 アフリカの思い出（エチオピア、スダノ） ゲスト：アリス・ウォーカー（作家）（同時通訳付き）
会場 ユニセフハウス 1階ホール	23日 アジアの子どもたち（仮題） ゲスト：新井満（作家）
入場料 無料	24日 日本でのユニセフ活動と子どもの商業的的搾取 ゲスト：東郷良尚（財）日本ユニセフ協会専務理事
	25日 子どもにふさわしい世界を作るためには ゲスト：安倍晋三（衆議院議員）
	26日 日本の子どもたちに期待すること ゲスト：毛利衛（日本科学未来館館長）（予定）

更新

2003年度のユニセフ子どもネット更新をおねがいします

今回のニュースレターには、2003年度のユニセフ子どもネットの更新のご案内が同封されています。更新作業がスムーズにいくように、4月22日(火)までに更新の手づきをしてください。2003年度もさまざまな活動をみなさんと一緒におこなっていきたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。

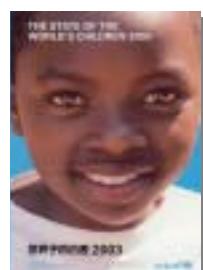
新しい資料のご紹介

『2003年世界子供白書』（日本語版）

2~3ページでも紹介している通り、今年の白書のテーマは「子ども参加」です。各国で活動をしている子どもたちの事例などが紹介されています。ご希望のネットワーカーには、1部まで無料でさしあげます。

『世界子供白書2003』7分

ビデオ キューバの幼稚教育プログラムやタイの子ども参加を導入した学校教育、アルバニアで10代の子どもたちが作ったテレビ番組など、子ども参加をうながすためのプログラムの事例が報告されています。



『2003年世界子供白書』とビデオの貸し出しのもうしごみは、ユニセフ子どもネット事務局まで。

お問い合わせ・もうしごみは

ユニセフ子どもネット事務局

(日本ユニセフ協会 広報室)

住所: 〒108-8607

東京都港区高輪4-6-12

電話: 03-5789-2016

ファックス: 03-5789-2036

電子メール: jcuinfo@unicef.or.jp

お知らせ Report

アジアの子どもの商業的搾取について学校で発表しました

昨日11月11日と18日に学校の授業の一環として、子どもの商業的搾取に関する発表をおこなった。タイ、フィリピン、カンボジア、ネパール各国の状況、子どもが東南アジアでどのように人身売買されているか、子どもたちのこの問題に対するとりくみなどについて調べたことを、日本との関連も含めて発表した。合計で約1時間、手作りのプリントとユニセフから貸していただいたビデオを使っての発表に、クラスメイトの反応はさまざまでしたが、ビデオに登場する子どもたちの発言や保護者が子どもを売っていることなどが衝撃的のようだった。発表前には、この問題について知らないというクラスメイトがほとんどで、知っていると答えた人は40人中5人だった。

被害者ではない私が発表することに戸惑いもあった。しかし、発表の1ヶ月ほど前に、学校でタイで貢春被害者の女性を助ける組織の方のお話を聞くチャンスがあり、私達にできることのひとつとして“CREATE AWARENESS（意識を生み出すこと）”ということを挙げられていた。私の発表を興味を持ってきてくれたクラスメイトもいて、私はこの発表で、“CREATE AWARENESS”的機会を少しでも生かすことができ良かったと思う。



ユニセフ子どもネット@関西

ネットワーカーがハンド・イン・ハンド募金活動をおこないました

学習会の時の話し合いで、ハンド・イン・ハンドに参加しようと決めた関西地域のネットワーカーが、1月4日（土）午前10時～午後3時まで、神戸市内で街頭募金活動をおこないました。中心となったネットワーカーたちが友達などにも呼びかけて、合計17人の中学・高校生が参加し、124,555円もの募金が集まつたそうです。

この冬一番と言わされた寒さの中、高校生は各学校の制服で参加しました。主催者6名（うちネットワーカー4名）以外にどれくらいの人が参加してくれたのか、事前説明会に参加していなしだいめん最初対面の人がはじめるなど、初めは不安もありましたが、みんなで仲良く協力してできたと思います。

岩島 史（17歳）

ユニセフ子どもネットニュースNO.3を読んで

ネットワーカーからの感想

- 学校に行きたくても行けなかったりして、かわいそうでした。私は学校に行きたくないとさがあるけれど、アフリカの人たちには、それはぜいたくだと思うような気がします。お金がなくて、生活の苦しい人びとの支援がもっと必要なことを知りました。
- 4ページに「世界の5人に1人は1日120円以下の生活」と書いてあり、すごく驚きました。それと、5ページの右にあるヨハネスブルクでの子ども達のスピーチで、政府と世界の人びとにに対する要求がありました。本当に共感します。当たり前のようなことを守るのがすごくむずかしい。だから私たちネットワーカーや、そういう問題に理解のある人たちが先頭となり、良い社会、良い世界をつくっていかなければならないと思いました。
- 以前からアジアで人身売買がひどい状態になっていることは、ユニセフのホームページで知っていました。“小さい子どもならエイズにはかからないという考え方を持ったおとなが、子どもの性を買ってもてあそんでいる”というレポートをみてぞっつしました。また、最近では外国からその子どもの性を買ってもてあそぶという事態もあるそうで、日本のおとなも多いそうです。このことは、日本人としてまた地球市民として絶対に許してはいけないことだと改めて認識しました。

